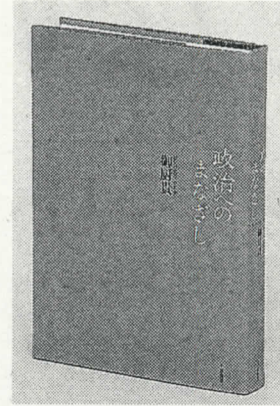


政治へのまなざし

御厨 貴著

人間への強いこだわり

(千倉書房・2730円)



みくりや・たかし 1951年
生まれ。東京大学先端科学
技術研究センター教授。

政治を論じる。これ以上何を？ かつて政治について数多くのことが語られ、論争が繰り返され、その結果、何も変わらないことが確認されたはずではなかったか？ 政治改革、政権交代、3・11。期待はすべて裏切られた。いまや「政治」という言葉は、軽薄で空疎な、さもなくば胡散臭い響きしか持たないのではないか。

こうした諦観を抱く私たちにとって、本書の慧眼は衝撃である。著者はオールヒストリーで名を馳せ、東京大学で教鞭を振るう政治史家であるが、復興庁復興推進委員も務め、学究と現実の狭間で鋭敏な問題意識をもって現代政治を憂えている。本書は講義や座談、吊辞など、筆者が「口演」「口上」と呼ぶ類いの文章を集めたエッセー集だが、全体を通して、「人間」に対しての強いこだわりがうかがわれる。

著者は、平等主義的でリーダーシップを欠いた社会を「学級会民主主義」と揶揄している。制度や政策を積み重ねていけば「いい政治」ができるという発想は、人が変わることの可能性を過少に評価しているという。元官房副長官・石原信雄の「最後は人」という言葉が印象的であるが、石原を含め宮沢喜一、後藤田正晴、坂本多加雄、佐藤誠三郎、升味準之輔など、戦後の政界・学界を支えた英傑たちへの熱い想いは止まることはない。「口演」というスタイルで五感を働かせながら政治の「原風景」を描写することによって、学級会民主主義では死角となる人間の葛藤や可能性を余すところなく伝えているのである。

東日本大震災の直後、著者が「戦後が終わり、災後が始まる」という刺激的な問題提起を行ったことは記憶に新しい。災後社会を「最期」の社会にしてはならないという危機感から、強いリーダーシップや異端的人材の重要性を提起したのである。『災後』を生きる私たちにとって、この言葉の意味は大きい。私たちがまだ「変わる」ことができるはずである。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)